

十一月作品

月集スバル

☆今月の四人☆ (桑原正紀選)

罪びとに似る

武田 弘之 神奈川

アイヌ語の高い島を名に負ふ島の山はとがりて北斗を指す
利尻富士映る海面にはしやぎてゴマアザラシの親子ら遊ぶ
桃岩は低けれど北の果てなれば高山植物勢ひ群れ咲く
被爆者の平均年齢よりも老いて生きあるわれや罪びとに似る
核弾頭十二万余を暴き出し無くするほかなし地球危ふし

不思議ナケレド

宮里 信輝 神奈川

南下せしシベリア寒気団と言ふマイナス5度の空気は刃物
止まず降る六花は天の凶器なり昼夜しんしんしんと降る
頭上よりみづ雫受く川面より飛びたち帰る雁見上げるて
公園のすみなるベンチ舞ひてきて花びらいちまいとなりやすむ
みつまたの枝は全てが三つ分かれせりナニゴトノ不思議ナケレド

きもの

小山 富紀子 京都

三味線の上書き老妓の着るを見て思ひ出したり祖母の一枚
三十年は後に着よしたたまひたる薩摩上布に袖とほす夏
涼やかに夏のきものは着こなせと言はれて女の覚悟を決めぬ
さらさらと縦縞の裾をさばきつつ祇園祭の五茶席めぐる
歩を運ぶごとに縦縞の裾をさばきつつ今売つ妓の縞袴の裾

ベサメ・ムーチョ

原賀 瓊子 東京

老年に浮輪のあらば摺まりたしむかし浮輪で海を泳いだ
蜂の巣は空巢といへどおそろしき しばらく巣から離れてるよう
ゼラニウムを枯らしたちからその土にことし三本振花のぼる
和歌は好き短歌はにがてといふ姉の枕のしたの『新古今集』
テキーラの味を未だに知らぬまま夏の夜に聴くベサメ・ムーチョ

☆

☆

水島 晴子 兵庫

殺られるな、こゑ呑みて見つ慰霊碑へすすむひとりの礼服の背を
枯枝で地に線を引きデルタなる街を語りき蒲池由之氏
田谷鏡の細しき歌に滲み出づる怖れに触れてさり気なかりし
雨の日の広島なりき霊喚びの炎はあかき舌とひらめき
旧盆を過ぎてやうやく声を張る法師の蟬よまだまだ生きよ

高野 公彦 千葉

紙の辞書、電子辞書またスマホあり世は変転し書店滅びゆく
便利さは不吉の香せり位置情報共有アプリなどその一つ
家族間殺傷事件ほつほつと絶ゆることなし 家族とは何
巢ごもりの我を呼びをり三条の橋のたもとの弥次喜多の像
京洛にゴシック美あり清水の舞台支ふる巨大列柱

奥村 晃 作* 東京

安倍晋三巨き政治家でありしかど凶弾死せりき警護薄かりき
「国葬反対」のプラカード掲げ首相官邸前に抗議の人等を映す
いきなり勝手に決められるものか国葬を自民党葬なら問題ないが
功罪の功より罪の大人フタして国葬を強行するか

言うべきは言つとかないとダメなんだ 黙つてるのは加担する事

森重 香代子 山口

地に低くもぢずりの花咲きのほり辺りの蝶のながく動かず
梅雨明けし砂利場になかく止まりある黒蝶の羽ときにひらめく
もんしろをわが掴み得ずびかぴかの青虫なりしを知りてゐるゆゑ
抽んでて夢のみどり揺れてをり蓮の池に風わたるとき
白緑の蓮の広葉を奔りきてかがやく水は掌に零れたり

日影 康子 富山

夫逝きて長かりし介護解かれたり朝の寺院にひとり草引く
温和なる夫の微笑の目に浮かぶ寺の離れにひとり居となり
冷えし西瓜小口に切りて鉢に盛り部屋へ持ちくるる子の優しさや
庭の奥処ゆつたり巡りて黄揚羽はけふも窓ちかき繁みに止まる
走り去る歲月速しヒロシマ原爆記念日にひとり黙禱し涙を流す

古屋 祥子 群馬

花の名を聞いては忘れまた聞いて(記憶のコツ)をやうやくへ(がっせん)
川縁に昨日見たる草はもうあらず其はまぼろしか、風のしわざか
新築も増築も今や不要なり 車椅子で行ける範囲で暮らさう
「もつと生きたい!」「もう死にたい」人向きむきにベッドに眠る

三十分時計の針を戻したし起床時間はまだまだ眠い

影山 一男 千葉

小島 ゆかり 東京

蟬声の湧きあがる空たましひの帰るところのごとく澄みを作り
枯れしまま残るあぢさるこの夏の惨を思へとばかりに映る
十本の桜の陰をとほりゆく蝶の行方を長く目守れり
高齢者見習ひわれは目蔭して見てをり夏の雲の乱れを
先頭に出ることのなき生ひとつ肯ひてまた晩年を生く

桑原 正紀 東京

木畑 紀子 京都

ポイ活が断捨離のことと思ひゐる人との会話しばしちぐはぐ
ささやかな撒き餌のやうなポイントに群がるあはれ流行るポイ活
いつのまにか溜まつてしまつたポイントはウクライナ基金へそのまま送る
ゆで麺を氷水にてきりり締め冷やし中華は完璧となる
妻の作る冷やし中華は麺の締め足りぬを言ひて叱られしかな

狩野 一男 東京

島田 暉 神奈川

みちのくはいろいろあるが花山の峠に湧ける清水恋しも
八月の橋わたつたら先生に会へる気がして丸山橋へ
二十世紀梨の季節を思ひつつ堪へてゐるなり東京猛暑
四回目ワクチン済んで待つばかり白河越えの大優勝旗
世界から戦争なくなる日の来るやそれは世界が無くなる日だべな

四回目のワクチン終はり心身は塩のひそけさ炎暑を帰る
物音のぼおーッとあをくきこえつつ港のやうな八月の夜
夜の蟬ニギツと鳴きてそれつきり それつきりなる者らのゆくへ
なにもかも隠してしまふ夏空に白骨いろの雲の峰立つ
さびしさはいふまでもなし素麺をトマトスープで食べてみたつて

自助自衛自粛の世なりガタガタとくづほれてゆく積み木社会は
パンデミック三年目の夏 滔々と時の大河はながれやまずも
こんなにも空のあかるい夏まひる無無明とつぶやいてみる
遠く見てなにかかんがへぬし鷺は翼ひろげてたちまち小さし
未来みえぬ令和壬寅秋八月「野ざらし紀行」冒頭そらんず

会社から遅く帰りし腕の中抱きし赤子はモナ・リザの笑み
交響曲第九番は星ことは眼閉ぢても光ささやく
姫女苑いつぱん一本根ごと抜く今日のわたしは独裁者なり
夜明け空吸ひてペダルを漕ぎゆけば空気が肺を青空にする
流木のやうな両足励まして今朝も歩かむこの世の坂を

大松 達 知 * 東京

清水 正 子 神奈川

ニルギリとティンブラどこが違うのかとなりの客は引き下がるなし
重いです。張り紙のある扉なり押したりわれの外腹斜筋

まだ子どもないんですか？ そのたびに傷ついたのは(まだ)の方だった
だからと午後はしているしてたりしたら、パレイドリアはげしく
このあとに回収される資料なれどメモをしておりすれば落ち着く

田 宮 朋 子 新 潟

小 嶋 一 郎 佐 賀

天地をゆるがす閃光、轟音を楽しみてをり戦ならねば

大花火途絶えたるときまた思ふ病みて面会できぬいもうと

大花火果てたる空はかびろくて名残りのごとくヘリの灯が飛ぶ

Maxときに乗らなくなりて二年半Maxときは消えてしまひぬ

コロナ禍のはじめに結婚せし甥は二年後子連れの披露宴する

津 金 規 雄 神奈川

後 藤 美 子 北海道

みどり濃く水澄む三島訪ね来てノースリーブの教へ子に逢ふ

三嶋大社のしだれ葉さくらひそと触る腰まで伸ばせる黒髪の上に

水あさき源兵衛川にネイル濃き足を遊ばす ふり返り見る

かつて教師、かつて学生 いまふたり冷酒のグラスを静かに合はす

別れ際のハグに驚くストレスに7キロ痩せし身をあづけきて

ハルキストならねど然り「年寄の始めた戦争で若者が死ぬ」

意味のない消耗戦をまだして何に急かせるブーチンならむ

クリムトの「黄金の騎士」さながらに堂々とあれウクライナ軍は

梅雨明けのはうが早かつた侵攻は六月に終ると識者いひしを

エカテリーナ二世愛蔵の香水瓶まなうらに今も夢のごとあり

喉過ぐる水のをさまるまでの間を目瞑る老いのこの夏の癖

曇りのち雨の予報に急ぐべき何事も無しはちじふろくの身

一頭の猿に騒ぎしこの郷もひと月を経て朝の虹たつ

熊本うたとの歌友までも知るはなぜ肋骨折りし老いのしくじり

われの死を幾人ほどが悲しむか中によるこぶ者もゐてよし

朝風の棚に揺れつつ目覚めたる合歡は細葉をふるふるひろく

捨てむ土袋に溜めて住み古りぬ十一階に二十年余を

ペランダに飛び来しゆゑに捨てがたく鉢に埋めたり羽根持つ種子を

ハエマンサス・ムルティフローラ花火のごと紅き花あつまりまあるくひらく

キラソソウまたの名ジゴクノカマノフタ紫蘇科濃紫の小さき花付く

福士りか 青森

田中愛子 埼玉

インターハイ終へた途端の受験生とまどふ姪が訪ねてきたり
「みんぱい」の五目ラーメン・油淋鶏 迷ひに迷ふ高三の姪
〈経済的理由〉が阻む進路希望わかりすぎてから押し黙る
アクリル板めぐらせてその中にゐる姪はちんまり頬杖ついて
アクリル板はづせば四人テーブルは八人座れるやうに広々

藤野 早苗 福岡

橘 芳園 新潟

いつ何にわたしは触れてしまひしか身に覚えなき多額請求
情弱は情報弱者の謂ひにしてネット世界の日陰を歩む
亡者らの手が伸びてくるワンクリック詐欺といふ暗き暗き淵より
情報^{かね}が金にすり替へられるさまネット詐欺師はまごまごと見す
無視せよと快刀乱麻を断つごとくデジタルネイティブなる子は言へり

風間 博夫 千葉

水 上 比呂美 東京

生ゴミと紙屑は同じ分類で燃やせるゴミの袋に捨てる
市認定「燃やせるゴミ用」ゴミ袋に捨てた紙屑高あれど軽い
「ごみ袋「大」で燃やせるゴミ用に捨てた生ゴミ三日分重い
ごみぶくろ使ひ切るときごみぶくろ入れし袋がゴミとなりたり
燃えるごみ燃やせるごみありプーチンは燃やしたいゴミ あぐんちくた 芥藻屑ぞ

ひたひより流るる汗をぬぐはずに僧侶は説けり卒哭忌の意
お供物をねらふカラスか法要をいとなむ傍に動かずにをり
夕涼みがてら歩める路地に会ふ里の人らのもの言ひやさし
靈魂がきたるかんかく薄けれどゆふかぜのなかの送り火さびし
虫の音の満つる深夜の庭に立ちすこし清らになれるうつし身
七十六単独行は死ぬための用意万端おこたらぬため
ねむりゐるときもひらきてゐる耳よ人は生きよとつくられてゐる
みくびらずおそれずつねにゆだんせずまへにゐる死とまあひをはかる
泣きながら生まれしわれ死ぬときもわかれかなしと泣きゐるならむ
貸すことも風切ることもなく過ぎて息するばかりの肩となりたり
〈夏小夏〉はどこの生まれのどこ育ち箱に詰められ東京に来ぬ
〈夏小夏〉は日向原産土佐育ち高知大串農園育ち
日向夏の学名はシトラス・タムラナで田村利親の名まへを冠す
〈夏小夏〉はテニスボールの大ききでグレープフルーツの妹みたい
〈夏小夏〉を送つてくれた友の顔うかんでくるよ〈夏小夏〉の上に

鈴木竹志 愛知

混濁の世とは言ひ条家族らは愉楽を求め列鳥を移動す
人と会ふその悦びがコロナ禍の人を動かす我慢仕切れず
合言葉「三年ぶり」が幅きかし夏の祭りが蘇りたり
何もかも「三年ぶり」のこの夏の活気をまづは良しとして、さて
雲たちが小気味よく浮く夏空を見しははるかに遠き日かとも

水上 美季 神奈川

莫塵しいてすつきり夏が広がりにて美しき絵本と回る扇風機
インスタに手作り梅酒並びるて夜の薄闇は垂直に来る
すぐ寝付く夫は強めの寝息たて心に何を育てをるらむ
片蔭を選び忍びのごとくゆく真夏の激辛カレー求めて
「夢の中へ」「少年時代」唄ひ合ひ(陽水ロード)と呼ぶ草の道

大野 英子 福岡

ちきう少しふくらむやうな緑なる宗像福津の山また田畑
牢獄のやうな鉄骨をちこちに伸びて瘦せゆくやうなわが街
自己主張するものばかりなる街にワシワシワシと蟬までが鳴く
ちちははを看取りし町の蟬あまたつくつくはふしとわれを鼓舞した
海へ海へわたしのからだをすり抜けるマリン通りの八月の風

松尾祥子 東京

松の木にしがみつくと蟬のぬげがらよひとつ命の飛び立てる跡
鳴いて鳴いて鳴いてもこの世変はらねど鳴きつくし蟬はこの世を離る
八月のゆふべの土に仰向けに横たはる蟬ひからびてゆく
はらからの鳴き声とほく聞きながら天へと還る蟬のたましひ
蟬鳴かぬ夏いつか来ん人間の影すら消えた水惑星に

奥村晃作歌集 令和4年7月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

象の眼 コスモス叢書第1213篇 六花書林

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七一―一五―一六

鈴木竹志歌集 令和4年6月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

聴雨 コスモス叢書第1211篇 六花書林

著者住所 〒448-0047 愛知県刈谷市高津波町三十四〇八